「つなげよう、支えよう森里川海」環境省が「価値再発見」を具体化

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 平野 喬

今夏は大変な猛暑続きで「これが地球温暖化か!?」と、刺すような陽差しを恨めしく思うと同時に、温暖化を防ぐために何かしなければと思う気持ちも一層強くなったのではないでしょうか。そんな人々の心に訴えるかのように、環境省から大変ユニークな取り組みが明らかにされました。

望月環境大臣は6月30日、「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの中間報告を発表しました。官房長をキャップにした官民からなるプロジェクトチームを作り、「自然の恵みの保全・再生と利用」についての取り組みを中間的に取りまとめたものです。

「森里川海を豊かに保ちその恵みを引き出す」「一人一人が森里川海の恵みを支える社会をつくる」というのが二大目標で、川で元気に遊ぶ子供たち（川ガキ）の養成学校の開校など具体的な活動例が9分野（表）40項目にわたって列挙されました。

一見すると、自然保護を担当する自然環境局の仕事のように思えますが、省を束ねる大臣官房の官房長のもとに各局の審議官と担当者、民間からアドバイザー、有識者18人が参加しています。異例の態勢づくりと、財源として来年度の税制改正で新税の創設を目指し、戦後70年にわたって続けてきた経済発展と開発のあり方の見直して、日本の貴重な自然の価値（自然資本）の再発見。ふるさとの見直しが、日本の力を高め、国際的にも誇り得るものになると指摘しています。

「森は海の恋人」運動が生きる

このプロジェクトチームの有識者の中には、この欄でも何回か紹介したNPO法人「森は海の恋人」理事長の畠山重篤さんがいます。宮城県・気仙沼の海で牡蠣の養殖をしている畠山さんは、豊かな海は森が育むと考え、1989年から川でつながる上流の森で植林運動を続けてきた漁師さんです。もう一人、京都大学名誉教授で、「森里海連関学」という学問領域を開設され、畠山重篤さんを教授で迎え入れた田中克（まさる）さんも参加しています。

魚の生態研究が専門の田中さんの現在の肩書は舞根（もうね）森里海研究所所長です。気仙沼の舞根湾にあった畠山さんの牡蠣養殖施設は東日本大震災ですべて流され、三陸の漁業は壊滅的な打撃を受けましたが、田中さんが所長を務める研究所は、「森は海の恋人」に寄せられた義援金などをもとに、牡蠣やニホンウナギの生態研究、子供たちの環境学習の場として2014年に開設されました。一漁師と一研究者の思いが結実した研究拠点ですが、今回のプロジェクトは二人の積年の運動と研究に、国もやっと理解を示し、新しい国づくりの柱にすることを宣言したことになります。一人の国民として、ふるさとを取り戻す活動にできる限り協力したいと考えています。

具体的な取り組みの内容

①	**森のメタボ解消、健全化** （森林施業の健全化等）
②	**生態系を活用したしなやかな災害対策** （干潟や湿地の保全等）
③	**「江戸前」など地域産食材再生にも貢献する豊かな水循環の形成** （藻場、干潟の再生、里海づくり等）
④	**トキやコウノトリなどが舞う国土づくり** （生き物にやさしい農業の推進等）
⑤	**美しい日本の風景の再生** （雄大な草原、里山風景の再生等）
⑥	**森里川海からの産業創造** （企業と地域のマッチング等）
⑦	**シカなどの鳥獣や外来生物から国土、国民生活を守る** （捕獲者の育成等）
⑧	**森川里海の中で遊ぶ子供の復活** （川ガキ、山ガキ、海ガキの養成学校の開校等）
⑨	**森里川海とつながるライフスタイルへの転換** （地域食材や環境配慮食材の購入促進等）

一般財団法人 地球・人間環境フォーラム
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。